アンドレ・ブルトンにおけるシュルレアリスムの浮遊するシニフィアン

Signifiant flottant of the surrealism in André BRETON

加　藤　彰　彦
Akihiko KATO

［要旨］
アンドレ・ブルトンにおいてシュルレアリスムの言語とは何かという観点から考察を始めた。ブルトンは現実の否定ということからシュルレアリスムを立ち上げている以上、現実をただ単に描写するだけでは意味がなく、そこで出てきたのがシュルレアリスムのイメージ論である。ただこれは詩のようなものであれば有効なのだが、散文詩であれ少し長いものになると問題が生じる。特に物語のようなものになると、それを支えるものは通常の言語を成立させている相互主観性ではなく、主体の持つ欲望であり、それを可能にするのがラカンの言う浮遊するシニフィアンであるということを明らかにした。

キーワード：アンドレ・ブルトン　シュルレアリスム　浮遊するシニフィアン

序章

シュルレアリスムが他の芸術運動と異なるのは、出発点もしくは前提としてアンドレ・ブルトンの現実世界の否定があるからである。従って現実に既に存在する価値あるものを書き写す際に問題になるのは、いかに表現するかということであって、価値あるものが文学以前に現実に存在していることを意に介さないという態度は、ブルトンの容認するところではない。

このようなブルトンの考えが示されているのは『失われた足跡』に収録されている「フランシス・ピカビア」という小文の中にある。この逸話はピカビアの体験したことであり、彼がブルトンに手紙で教えてくれたということなのだが、ピカビアの友人は展覧会で見たセザンヌの描いたリンゴを見て、これはただ単に模写しているだけで、「美しいということは、作り事を上手に描くことです。」（PI p.281）[1] と述べたという。絵のように美しいという表現があるように、実際のリンゴ以上に美しく描かれていたとしても、その美しさというものはそのリンゴに既に内在しているものであって、価値はそのリンゴの方にあるのだ。プラトンが芸術を否定し、それは模倣でしかないからだと言ったことも、ここでは正しいのだろう。

このような状況を踏まえた上でブルトンのシュルレアリスムのあり方を考えるならば、ブルトンにとって前提となる姿勢として書くことに対する意欲がある。つまり書くことによって想像力がかき立てられる、もしくはかき立てられた想像力を表現できるということである。これは先程と同様に『失われた足跡』に収録されている「マルドロールの歌」の中に次のように書

かれている。「何と多くのこのようなエネルギーが（一時的だと、信じているわけだが）書くことに使われるのか、それは熟考に値する問題だ。力への意志を最もよく満足させるものを見出すのは、熱心であるかどうかは別にして、今尚文学的作業においてなのである。」（PI p.234）

更に続けて「文学は現代作家にとっては古い思考方法に有利に取って代わる力強い機械になる傾向があると私は信じている。」（PI p.234）

ここにおいて「機械」という言葉が出てきたことから、我々はジル・ドゥルーズの「欲望する機械」を想起することができる。ドゥルーズは主として資本主義批判を展開するわけであるが、それは絶えず走り続けていかなければならない資本主義は欲望する機械となり得ているからであるとする。そして同様のことは資本主義以外に我々の身近な事柄についても言えるのであって、例えば自動車という本来は移動手段、運搬手段であったものが、乗ってみるとスピードも出て快適であるということから、本来の目的から離れて乗ることだけを追求するという欲望する機械となる現象にもみられる。あるいはまたそれは我々自身についても言えるのであって、本来は生命を維持していくために食べることが必要であったのだが、食べてみると美味しいあるいは美味しく食べられるように工夫するといったことから、食べることが目的の美食家が生まれてくる。

これは明らかに程度問題であって、正しい正しくないと分けて考えることはできないのであるが、さて文学の問題である。もともと書くことは忘れないために記録しておく必要があったとか、眼前にいるのではない人に伝えるための伝達手段として用いられてきたと思われるが、それがちょっとした話を書くと、それが人々に読まれて娯楽の対象になるとか、何らかの政治的意図でもって思想を広げるということで発達してきたと思われる。そしてその書くことには想像力を介在させ、飛躍させることができるという可能性を見出すわけであり、ここにおいてブルトンの言う「力強い機械」となるのだ。更にブルトンが「言葉それ自体は恐らく他の起源を持たないのだ。」（PI p.239）と書いているように、自由となる可能性を孕んでいる。

ウィトゲンシュタインは、この現実における言葉のあり方を「言語ゲーム」と表現し、「語り得ないものについては沈黙するしかない」と言っている。確かに我々が他の人たちと食事を共にしている時、自分の手の届く範囲にはない物について、「そこにある何々を取って」と言って、それを手渡してもらうことは日常的に可能である。このことが何の不思議もなしに可能になるのは、そこにいる人たちにとって少なくともその何々というのが何であるかがわかっているというのが前提としてある。ところが我々の現実というのは食卓から外に広がっているわけであり、そもそも言葉というのが本来ならあってしかるべき指示物なしで成立するということにまで至るわけである。つまり鼻の長い動物として象という言葉が存在する。これは昨日動物園に行って象を見てきたという風に言えるのだ。その時つまり象を見てきたと誰かにしゃべっている時点において、象そのものはその場にいないわけで、いないにも拘らず象という言葉を使うことができるのであって、それは当然のことでもあるのだが、ここにおいて言葉はその指示物から離れて存在することが可能になってしまう。そしてもともとは象という鼻の長い動物がいて、それを指し示す言葉として象という言葉を使えたはずなのであるが、指示物がそこになくても言葉は成立するという事態を受けて、もともと指示物がなかったとしても、言葉は成

立するという事態にまで至ってしまう。ここにおいてラカンの言う「シニフィエなきシニフィアン」が成立することになる。更にソシュールの考えによるならば、言葉というものは実体を持たないものであって、他の言葉との差異によって成立するということであり、シニフィエなきシニフィアンは本質的にありだということになってしまう。このことは例えば、辞書はある言葉の意味を説明するのに、直接その指示物を持ってくるのではなく、他の言葉によって説明するという構造になっていることからも明らかである。ここにおいて注目すべきは、言葉は指示物なしでも成立するということは、敢えてその指示物を断ち切ってしまう、あるいはもともと存在しないものとして成立させてしまうということが可能になるということである。従ってブルトンがフィリップ・スーポーと自動記述を試みるにあたって「外部世界を除外する」（PI p.274）ことを考えついたのは当然だろう。

ただこの時点においてブルトンが考えていたのはある種の「夢の話」（PI p.275）であって、夢を基準として考えている以上、依然として現実に束縛されているのは仕方のないことだろう。例えばブルトンは『通底器』において夢一般について考察を加えているのであるが、その中でブルトン自身が見た夢について、その内容を明らかにした上で分析を試みているのであるが、それは現実との関係を指摘していくという作業なのである。つまり現実においてこれこれの出来事があり、自分はそれに対してどういう思いでいたかということで、夢の解説を試みているのである。ブルトンにとって本来あるべき言葉というのは、例えば『黎明』に収録されている「自動記述的託宣」の中にあるように、「視覚的であったり触知できる映像を表現したりあるいはそこから派生したりする言葉の、同時生起でもないし直後にさえない、前もっての介入なしの白さや弾力性の表現のような、言葉に先行されてもいないし伴われてもいない」（PII p.389）ということであり、「意識と無意識の間で広がる、評価し得ない表面の、その領域における自由な流れを我が物にするということである。」（PII p.389）

敢えて言うならば何らかの目的や意図でもって言葉を書くわけではなく、言葉も何らかの目的や意図でもって書かれるわけでもなく、言葉は書かれたものが言葉と共鳴し合うことによって本来は存在していなかった効果を醸し出すために予め存在していたということなのである。

第一部　シュルレアリスムの文学または詩学

第一章　シュルレアリスムの言語

シュルレアリスムの詩学あるいはイメージ論というものは、ブルトンによって『シュルレアリスム宣言』の中において示されているピエール・ルヴェルディのものがよく使われている。同じような内容はブルトンの『通底器』においても示されていて、要はかけ離れたものを組み合わせるとシュルレアリスム的イメージが現出するというものである。確かに『シュルレアリスム宣言』において示されているシュルレアリスム的イメージの中には、例えばロートレアモンによる「シャンパンのルビー」（PI p.339）があり、またロジェ・ヴィトラックによる「焼失した森の中で、/ ライオンたちは生き生きとしていた。」（PI p.339）というものがある。

現実的な観点から解説するのも愚かであるが、現実にはあり得ないことを想像することで、まさに超現実的な世界を現出させる効果がある。つまり技法として全くかけ離れたものを組み

合わせるということが言えるのであるが、問題は二点あって、一つはそのイメージの元となった言葉が指し示す現実は不在であるということと、もう一つは言葉自体は確実に存在しているということなのである。これをブルトン自身の言葉によって置き換えるなら、『野を開く鍵』に収録されている「上昇記号」において、「詩的アナロジーは心を動かされ、更には官能的な枠においていかなる束縛もなく、超自然的なものに陥るいかなる傾向を示すことなく、保たれるのである。それは《不在の》真の人生を垣間見させそれに値することを目指すわけで、それは形而上学的な夢想においてその実体を取り出すことはないのと同様に、何らかの《彼岸》の栄光の獲得に向かわせようと考えることは一瞬たりともないのである。」（PIII p.767）

また『吃水部におけるシュルレアリスム』において、シュルレアリスムの自動記述とジェイムス・ジョイスの内的独白を対比させ、その独自性を明らかにする中で、「肝心なことは、シュルレアリスムにとって、言語の（錬金術の意味において）《第一物質》を見出していたということを確信することだったのである。」（PIV p.20）と書いている。

これは要するに本来ならあるはずの指示物を欠いた言語の獲得ということであり、ラカンの用語に従えば、シニフィエなきシニフィアンを獲得したことにブルトンは自覚的であったということである。ここにおいて問題になるのは、シュルレアリスムであれ何であれ、我々がそれと認識できる言葉を使う以上、そこには通常のシニフィエを持つシニフィアンが存在するわけであり、それならばシュルレアリスムの言うシニフィエなきシニフィアンは何かということである。ここでラカンの言うクッションの綴じ目を持ち出すなら、ブルトンはシュルレアリスムという概念を示すことによって、言葉の世界においては実質的に何も変わっていないにも拘らず、言葉の外には現実は存在しないこと、全ては言葉によって決定されることを明らかにしたのである。つまりブルトンの言うシュルレアリスムが排除しているのは、指示物があり、それを指し示す言葉が存在するという基本原理、全てのシニフィアンにはシニフィエを伴っているという調和的存在である。ブルトンが現実世界を否定するということは、シュルレアリスムの言語においてシニフィエは原初的に抑圧されているということであり、その抑圧から生じてくるものは、つまり本来あるべきものがないことによって生まれる空白を埋めるものは他の多くのシニフィアンなのである。ここでともすれば錯覚に陥りがちなのは、原初的に抑圧されたものは何かと問うことであり、逆に言えばそれが存在すると信じることである。ところがそれはもともとないものであって、ないことが秘密になっているのである。

これはデリダの指摘する法のあり方を容易に連想させるだろう。つまりカフカの掟の門にあるように、掟の門の中に入ろうとする男を入らせない、入ることを禁止する機能を果たしているのであるが、実際のところ掟の門の向こうには何も存在していないのである。

ここにおいてヘーゲルとラカンを併せ読むことによって、言葉がどのように生き生きとしたものとして存在するようになるかが理解できるだろう。つまり本来的に存在するはずであった指示物を切り離し、その物がなくても言葉はそれとして役割を果たすことができる。ここにあるのは物の不在である。このことによって我々にとっての現実は象徴的な虚構となってしまう。言葉にはその力があるのである。もちろんだからといってこの現実は虚構にすぎないのであるから、無視していいということにはならない。本来は何もないものが、あたかもあるかのよう

にして機能して我々の生活を支配しているというのがまさに現実なのである。ラカンの言う大他者は存在しないと言い切ったとしても、根拠のない情報に振り回される世間もまた実際に存在するのである。つまり存在していないにも拘らず有効なのである。だからといって、何かの言葉を発することが現実を変えるというわけでもない。

厳密に言うならば、正しい言葉を見出し発することによって、現実は変わることができるということになるだろう。これを理解するには精神分析を持ち出すのが有効であって、例えば意味不明の鬱状態が続いていて、いろいろ話をすることによって、幼少期の体験に原因があるとわかるとすれば、その時の体験を言葉で捉えることによって、治療が行なわれたということになるのだ。当人にとって原因とは別に現在の鬱状態とか身体の不調とかいったことは現実にあるのであって、ここにその原因となる言葉が精神科医によって示されるということで、ここにあるのは言葉と現実としての物を隔てている深淵である。

これをどのように克服して矛盾のないものにしていくのかが課題なのであるが、ヘーゲルはそれを精神の力を認めることによって克服するのである。例えば既に示したように、ロートレアモンの「シャンパンのルビー」というイメージにおいて、実際の指示物であるシャンパンもルビーも切り離されてしまっていて、最早存在していない。つまり残っているのは単なる記号にすぎないということになるはずであるが、例えば「シャンパンのルビー」を「AのB」と置き換えてみれば、それがただの記号にすぎなかったのではないということが明らかになる。単に指示物を切り捨てただけではなく、そこにある言葉と物との間に出来る距離もしくは空白に恐らくは別のものが入り込んできていることに気付くべきなのである。ラカンならそこに現実界を見出すであろうが、ブルトンがシュルレアリスムと呼ぶものは、その存在論的な立場で言えば、物の不在による言葉の支配、つまりは現実界がその存在を明らかにするような形式なのである。というのも言葉の指示物は既に失われてしまっていて不在であり、それを言葉の根拠とすることは出来ない。むしろ言葉の根拠を探し求めようとすることによって、我々はその言葉が形成している象徴的現実が出てきた、まさに現実界に直面させられることになる。つまり何故その言葉が出てきたのかということである。

ここにおいて我々はシュルレアリスムの魅力を再認識することができるのであるが、仮にその言葉を出してきた根拠について偶発的なものであると答えるとしても、その言葉が生まれる前の深淵を問題にする必要がある。その深淵をあたかもなかったかのようにして乗り越え、出てきた言葉に満足するのではなく、その深淵それ自体を問題にすることによって、言葉の指示物によって構成されている現実とは違った世界が確かに存在することを知るのである。ここにある世界とは、想像力を駆使して書かれることによって成立する虚構の世界のことを指すのではない。そうではなくて、言葉を成立せしめている現実なる世界が現実そのものでもなく、現実の中にあって現実以上のものとして存在するということであり、この現実から現実界への移行がブルトンの言うシュルレアリスムの言葉のあり方として求められているというわけである。

第二章　シュルレアリスムの物語

ブルトンのシュルレアリスムのイメージ論を例証するものとしては、『シュルレアリスム宣

言』の中で示されている「詩」がある。これはブルトン自身新聞の見出しやその一部を切り抜いて寄せ集めてできたものであって、実際現物はそのようなものとして存在する。個人的にはブルトンによって書かれた他の詩や自動記述の作品よりもシュルレアリスム的魅力に満ち溢れていると思うが、それでもブルトン自身言っているように、できるだけでたらめに寄せ集めたものとは思われない程ある種のまとまりがある。詩的作品としてはこれで充分であると思われるし、このような詩をいくつも作り続けることによってシュルレアリスム的意図は充分に達成されると思われるにも拘らず、例えばブルトンがシュルレアリスムと同義語として捉えている自動記述の作品を見れば、明らかに物語性を伴った散文詩になっている。これは何故なのか。ラカンは『エクリ』に収録されている「主体の転覆と欲望の弁証法」において、次のように明らかにしている。「我々のシニフィアンについての定義は次のようなものである。あるシニフィアンは、他のシニフィアンの代わりに主体を表現するものである。このシニフィアンは従って他の全てのシニフィアンが主体を表現するその代わりのシニフィアンとなるだろう。つまりこのシニフィアンがなければ、全ての他のシニフィアンは何も表現しないだろう。」（EII p.181）

ここにおいて問題になってくるのは、あるシニフィアンは別のシニフィアンとは違っているという差異性にあるのではない。そうではなくて、あるシニフィアンと別のシニフィアンとの間に成立する関係性ということである。更に言うなら、あるシニフィアンにとって代わることのできるつまりは代理表現できるシニフィアンは果てしなくあり、そしてそれは他のシニフィアンについても言えるということなのである。これは当然の事態であるのだが、このとりとめもないシニフィアンの入り乱れた状態を全体としてまとめる必要性が出てくる。

例えば『資本論』において示されている貨幣の存在を考えれば、この事態は理解しやすいだろう。つまり物々交換の段階である物と別の物を交換するという場面において、ある程度は価値の基準を設定することはできる。ただこれが様々な物の出現を伴うようになると、何をどう基準として設定すればいいかわからなくなってしまう。ここにおいて貨幣の出現が要請されるわけである。ところが、貨幣とは違ってシニフィアンにこのような大文字で捉えられるべきシニフィアンを見出すことはできない。あるシニフィアンはそれをある程度は過不足なく代理表現するシニフィアンを見出そうとするのであるが、必ずしもそれは適切であるとも十分であるとも言えなくて、従って更に別のシニフィアンを求めるという事態に至るのである。

この状況を別の例を持ち出して考えてみるなら、モーツァルトの『ドン・ジョバンニ』が有効だろう。ドン・ジョバンニは女性全てを求めるという野望というか欲望を抱くのであるが、これはまさに大文字で書かれるべきシニフィアン＝女性を求めるということになるだろう。ただそれは無理な話であって、ドン・ジョバンニは現実にはできるだけ多くの女性と関係を持とうとする。ところがいくら数多くの女性を相手にするといっても、それが大文字で書かれる全体には到達できないのは明らかであって、ドン・ジョバンニは永遠にある女性から別の女性へと移っていくことを運命付けられているのである。

そしてここで問題になるのがいわば価値の変化であって、当初ドン・ジョバンニが女性を求めるのはその欲望に根拠を置いていたのであるが、今やドン・ジョバンニを突き動かしているのは女性の数を増やすということになっているのだ。つまりここにおいて明らかになるのは、

求められるべきは大文字で書かれるべき女性＝シニフィアンではなく、いかにシニフィアンの数を増やしていくかに自らの欲望を結び付けているということだ。このことは、大文字のシニフィアンに到達できないということから、失敗することを予め運命付けられていることになるのであるが、あるシニフィアンから別のシニフィアンへと際限なき置き換えを求められるということで、ラカンの言う欲望の維持としては極めて効果的であるのだ。

ただこれだけなら、その一面を捉えて、記号と戯れている自由な精神という風に映るかもしれない。ところがブルトンのシュルレアリスムは、その自由を現実の否定という観点にまで行き着かせているのである。つまりブルトンにあるのは現実から解放された言葉の世界に自由に戯れることではなく、主義主張に突き動かされているということなのである。つまりあるシニフィアンに対して別のシニフィアンを持ってくるという時、既にそこに存在する主体＝語り手がいてという話ではなく、持って来られた別のシニフィアンの中に反省的に自己を見出すということであり、ラカンのシニフィアンの定式である「一つのシニフィアンが別のシニフィアンに対して主体を現わす」を想起させる。ここにあるものは単なるシニフィアンの連鎖ではなく、ある種の流れを表現している。ところがこの流れはあたかも目的地を目指しているようではありながらも、その目的地に到達してはならないのであって、ある種の空虚さを伴っていなければならない。つまり意味を求めてはならないのであって、シュルレアリスムがそれとして成立するためには、空虚なシニフィアンが存在しなければならないのだ。しかしそのためには、問題となるシニフィアンが空虚そのものを意味するのでなければならない。例えばその一つとして考えられるのがラカンの言う「大文字の他者は存在しない」というテーゼによって語られる大文字の他者であって、存在しないならば、ウィトゲンシュタインの言うように沈黙する他ないのであるが、それでもそれを問題にしなければならないのであって、その理由として挙げられるのが神の不在であり、神が存在しないならば、それに代わる存在として大文字の他者に期待するという心理が生まれてくるのは当然のことなのだ。

このような精神構造のあり方は、例えば「私は幽霊なんか信じていない、でも私は幽霊が恐い」という表現に如実に示されているだろう。また「私は何か」という問いに対しては、身体を伴ったある種の容器と答えるのが正しく、厳密に言うなら、私は存在しない、ただの空虚であるということではあろうが、それで終わってしまっては我々は生きていけないのであって、その空虚さといかに向き合って、必要ならばその空虚を何らかの形で埋めていくことが求められるわけである。このように空虚さについては様々に提示されるわけであって、ただそれに誠実に対峙するといっても、結局のところは空虚であることを再認識するだけという事態に陥るのであって、それを言葉でもって修復していくのがシュルレアリスムの務めであろうと考えられる。その場合、ブルトンが『通底器』において夢の研究分析を行なっているように、夢というものが一つの形式として参考になるのではないかと考えられる。もっとも夢が理想型というわけではなく、夢として示されているものにシュルレアリスムのあり方が垣間見えるのではないかということである。そしてその一つを提示するなら、夢が物語形式で語られるということであり、シュルレアリスムの言語も短い詩として表現されるのでなければ、物語の形式に依存せざるを得ないという風に考えられるのだ。ただ夢の形式で語ることについては関係がないわ

けではなく、夢を見ている主体が主人公で、ある出来事があって、その結果どうなるという枠が提供されてしまうわけで、果たしてそれが空虚さを表現するのに適切であるかどうかについても考えなければならないのである。ラカンが言うように、我々が悪夢から目覚めるのは現実へと逃避しているのであるというのであれば、物語から逃避することも考えなければならないのだろうか。

第三章　シュルレアリスムで使われている言語は通常の言語である

シュルレアリスムというと現実から遊離したまさに非現実的な印象があり、かえって気付かないことになるのだが、使われている言語は他の写実主義的な文学のそれと同様に極めて日常的なものである。つまり表現手段は同じということなのだが、それをいかにして使っていくかという点で違いが出てくるのである。例えば極めて現実的な出来事を問題にしている歴史（の教科書）を見ても、物語を単純に直線的に記述することの困難は明らかである。文学においては使われる言語は決まっている、書くべきことも既にある、後はそれをいかに書くかだということから、様々な文学技法が生まれてきたわけであるが、問題なのは辿り着く先がこの現実の中に既に用意されているかどうかということなのである。シュルレアリスムも同様に辿り着くべき先は現実にあるのだが、他の文学との違いは、それが既に現実の中にあるか、あるいはそれを現実化させて生み出していかなければならないかにかかっている。

これを理解するためには、探偵小説の例を持ち出してくるのが適切だろう。探偵小説の場合まず殺人事件が起こる。ここで敢えて言うならば、殺人事件など実際に起こっていなかったとしても問題はなく、当然あるはずの死体が存在していなかったとしても構わないのである。このことはミケランジェロ・アントニオーニ監督の『欲望』の中において、カメラマンがたまたま写真に写った映像の中に死体らしきものを発見し、その場に赴くと実際それは死体であったのだが、翌日明るくなって再度確認に行くと、その死体が消えていたという事態に対して、それでも物事は進んでいくという現実のあり様を理解するのを思い起こせばいいだろう。

この殺人事件もしくは死体の存在を合図にして、探偵小説は開始されるわけであるが、表面的には犯人は誰で動機は何であったのかを名探偵が解明することで、全ては終わるように思われるが、実は問題になっているのはそのことではなく、つまり誰が犯人であろうと動機が何であろうとどうでもよくて、肝心なのは事件解決に至るまでの物語をどのように再構成していくかにかかっている。既に事件は起こっていて、犯人も存在しているのであるから、後は書くだけだということになるのであるが、事はそう簡単ではない。

その理由の一つとして、最終的に事件を解明する名探偵がいかにして犯人を知り、動機に辿り着いたかを説明しなければならない点にある。名探偵だからできて当たり前という風に我々は思ってしまうのだが、肝心なのは名探偵が真相を知ることではなく、我々にわかるように説明しなければならないということなのである。テレビのシリーズとして放映されていた『刑事コロンボ』は、最初に犯人が殺人事件を起こすところから見せられ、我々は当然の如く犯人を知っていて、この我々が知っているくらいであるから刑事コロンボが知っていても何の不思議もないというわけであるが、むしろ問題はその全知全能さにある。まるで最初から犯人を知っ

ていたかのようなのである。もちろん探偵小説は娯楽として読むものであり、一種のゲームなのであるから、名探偵が簡単に犯人を見つけてしまうのも、一つの決まり事なのだということにはなっている。ところが探偵小説が娯楽として成立し、ゲーム感覚を味わわせることができるためには、犯人が誰であるかを明らかにすることではなく、というのも犯人など誰だってよく、知ったとたんに忘れてしまうような存在であるからだが、我々が求めているのは、いかにして犯人を見出すに至ったかの過程にあるのだ。

この点に注目したのがラカンの「『盗まれた手紙』のゼミナール」であって、これはエドガー・アラン・ポーの『盗まれた手紙』を題材として扱っている。この探偵小説の中では殺人事件は起こらないが、問題となる手紙を巡る攻防で、犯人は誰で動機が何であるかはわかっている。ここにおいてフロイトも言うように、問題となっている手紙の象徴的意味を問うということはしてはいけない。むしろすべきは、その手紙を別の言葉で置き換えることであって、その手紙は当初は王妃宛てに送られた恋文であって、それが大臣の手に渡ることによって政争の道具となるといった具合である。深い象徴的意味を探ろうとすると、結局何もわからなくなってしまう。正しいかもしれないし正しくないかもしれないし、そのどちらかであるかもわからないということなのだ。このように物を指し示すシニフィアンの連鎖が、解決の糸口となるのである。これに対してシュルレアリスムはどうか。探偵小説の中にあって問題とされるものは、常に既にそこにあるのだ。問題はいかにしてそれを明らかにするかであり、更に言うなら、それをいかに語るかということになる。ところがシュルレアリスムにおいて問題となっていることは、常に既にそこにあるわけではない。無意識的に、あるいは敢えて言えば欲望が求めるものを察知していて、その方向に赴くことを要求するかもしれない。

ただ指摘しておかなければならないのは、あたかも非現実的なイメージで語られることが多いために、その実現も空想の世界の中で充分と思われるかもしれないのであるが、そうではない。あくまでその実現を現実において求めるのである。ブルトンは理想の女性を求めるのが空想の世界や文学の世界であったとしても、それで十分というわけではない。あくまで現実の世界において出会うことを求めるのだ。ブルトンは『白髪の拳銃』の中にある「いつかはそうなるだろう」において、次のように書いている。「想像力、それが何から借用しようともそして――それは私にとって証明すべきものとして残っているのだが――実際それが借用している（下線原文）としても、実生活の前で屈服しなければならないことはないと私は言っておこう。（中略）想像的なものは現実になることを目指すものなのだ。」（PII p.30）

つまり探偵小説（あるいはそれによって代表される他の文学形式）とシュルレアリスムの違いは、使われているものは同じであったとしても、目指すものが決定的に違っているということである。何もシュルレアリスムは高尚であるというわけではなく、他の文学形式がこの現実に常に既にあるものを求めているのに対して、シュルレアリスムは往々にしてそれが未だ現実には存在していないということがある。空想の世界に甘んじているならば、それで自足的であり十分なのであるが、問題はそれを現実に求めるということである。探せばいいということになると、あるいはそうせざるを得ないのかもしれないが、その前提としてあるのは求めるべきものは現実に常に既にあるということである。ミシェル・フーコーが『言葉と物』において、

ベラスケスの『王女マルゲリータ』の絵を例として示しているように、我々の視点を変えることによって真相が見えてくるということがあるかもしれない。ホルンバインの『大使たち』という絵は、少し斜めから見ることによって、当初はよくわからなかった頭蓋骨が見えてくるということもあり、見るべきもの見出すべきものは隠されているのかもしれない。

探偵小説に話を戻すなら、犯人は私ですと名乗り出るわけではなく、あくまで自分が犯人であることを隠そうとし、自分自身多くの人に紛れて自分を隠そうとするのであるから、物語は隠されているというのが前提としてあるのかもしれない。ならばシュルレアリスムにおいても求めるものは現実においてということがいわば絶対条件としてあるならば、逆に言えばいかにわかりにくくしてあったとしても、求めるべきものは常に既に現実にあるのだということが言えるのかもしれない。あるいは更に言うなら、自分自身求めるものが何かわかっていないということであるかもしれない。その手がかりとしてブルトンが考えたのが無意識なのであるが、例えば抑圧された欲望といったものについて考えてみるならば、我々は本当は知っているにも拘らず、抑圧して封じ込め知らないことにしているのであるから、それを再確認する必要があるということにもなる。しかし知らないということは知りたくないということと同じであって、それを知ろうとするとそれまで存在していたものが消えてなくなるという風に初期のフロイトは考えていたことも指摘しておこう。

第四章　ブルトンにとっての謎[2)]

ブルトンは1950年7月J.L. ベドゥアンとD. ドマルヌのインタビューに答えて、次のように発言している。「我々はどこから来ているのか。我々は何なのか。我々はどこに行くのか。（下線原文）テレビはゴーギャンの有名な油絵の前でそれらについて打ち解けて話し合うことを我々に認めてくれないでしょうか、その絵の隅には金色の地でそれらが書き記されているのです！この三重の問いには唯一の真の謎が存在していて、そのそばでは言い伝えがスフィンクスの口で言わせる謎は取るに足らない言葉なのです。」（PIII p.618）

ラカンの「『盗まれた手紙』のセミネール」の最後に示されている「手紙は必ず宛先に届く」には様々な解釈があるが、少なくとも結果から見て全てはそうなるように決められていたとなると、そこに運命の存在を感じないわけにはいかない。手紙とはそもそも受け取った人が受取人なのであるから、必ず届くようになっているのだと言うこともできるが、一種の短絡のようにも思えるし、肝心なものが抜け落ちているような気もする。

崖から大きな岩が落ちてきて、下にいる人に当たる時、何故それは徳の高い人に当たり、犯罪者のような悪徳の持ち主に当たらないのかという不思議に対して、マルブランシュは神の恩寵について答えていて、つまり神はそのような個人的次元については何も考えず、もっと大きな宇宙の秩序の方に関心があるのだとしている[3)]。これについては答えようがないが、個人の損得というものが、よく働いたから多くの賃金が支払われ、さぼっていたから賃金は減らされるか支払われないという至極当たり前のように物事が決定されているのではなく、偶然であるとはいえ、救われるか呪われるかが結果からすれば予め決められているように思われる時、そこに神の介在があるかどうかは別にして、私の人格とか特性とかいったものとは全く関係がな

いということなのだ。徳を積むような生き方をしていても、どんな災難があるかもしれないということで、悪行に走ることになれば、それこそ神様の思うツボであるかもしれない。つまり悪行に走ることは予め決められていたということなのだ。というのも手紙は必ず宛先に届くのであるから、その人が悪行に走ることは決められていたのである。何らかの理由を持ち出してくることは欺瞞的であって、別の出来事があったとしても同様の結果になっていたということである。ここにおいて、ラカンの言うシニフィアンの恣意性について言及することができるのであるが、この現実には様々なそれこそ無数のシニフィアンに取り巻かれていて、そのシニフィアンに対してどのようなシニフィエを結び付けるかについては、ある意味本人次第ということにもなる。ほんのちょっとしたことにそれ自体が背負い切れないような大きな意味を持たせるというのは明らかに錯覚である。私は手紙の受取人として定められているのではなく、たまたま手紙を受け取ったことによって受取人となるのである。そして受取人となった時点で、初めてここに私の運命というものが設定されるのであって、あたかもそれは予め決められていたかの如くなのである。もちろんここにおいて人の心理として、前もってその運命を知っておきたいと思うのは当然である。しかしある意味既に知っていると考えることができるのは、「手紙は必ず宛先に届く」を象徴的次元で解釈した時である。

例えばブルトンが現実世界を否定しシュルレアリスムを標榜する時、ブルトンの意図は達成されるのか。ブルトンは『シュルレアリスム宣言』において超現実の獲得を目標として掲げ、生涯をかけることを明らかにしているのであるが、その達成の有無に関わらず、ブルトンがその意図を達成できているとする根拠は次のようなものである。つまりブルトンは自分が位置している現実世界に、そう好んではいないだろうがそれでも積極的に関与しているという事実がある。というのもブルトンはシュルレアリスムの法王と言われるが如く、この芸術運動の中心人物なのであるからだ。そして関与している現実世界を否定することによって、ブルトンは見事にシュルレアリスムを立ち上げることができたのである。これは現実を否定しながらも、現実に適応しているということになるだろう。つまりブルトンにとって手紙は必ず宛先に届くのであるが、何故ならその宛先とはブルトン自身であったからだ。

そして一旦シュルレアリスムという枠組みが出来てしまえば、全てはその枠を通して与えられることになる。『シュルレアリスム宣言』において、過去のあるいは現存する作家たちに対して、シュルレアリスムか否かの判断を下すことができるのは、その枠があるからこそである。この枠について特権的であると非難することはできない。というのも、フーコーがエピステーメーという用語で示した如く我々は既にある枠付けをして物事を捉えているからである。そして「手紙は必ず宛先に届く」の更なる解釈は、様々な人と出会い、様々な作品と出会うことによって、その手紙の宛先人はまさに自分自身であると思い、また更にその手紙に返事を出さなければならないように感じるというものである。

これはブルトン自身の誤解であるかもしれず、というのも宛先に名前が書かれていたわけでもないからであるが、それでもロートレアモンの『マルドロールの歌』が長く忘れられた存在であったにも拘らず、ブルトンたちによって発見され、読まれるようになったということを考えるならば、ブルトンは借りを返したということになるのであろうか。というのも手紙はただ

単に相手に何かを伝えるだけではなく、何かを要求するものであるかもしれないからだ。ただこのような解釈には予定調和説的なところがあり、例えば植物学のリンネには自分の専門外の『神罰』という本がある。ある人が人生において悪事をすれば必ず罰せられる、もし自分の人生においてそういうことがなければ子や孫の世代に何らかの罰が与えられるというものであるが、子孫にまで広げていけばこの理論は必ずや証明される。逆に言えば、証明されるまで範囲を広げていけばいいからだ。このような解釈は必ずうまくいくようになっていて、つまりは自分に都合のいいところしか見ないからだ。つまり占い師が相談者に対してあることを言い、それに対して相談者が「それ当たってます！」と言った時、その時既に相談者は答えを知っていたのである。知っているからこそ当たっていると答えることができるわけで、自分が前から探していて、既に持っているものを再認識する形で発見するのである。このように考えるならば、ブルトンのシュルレアリスムにおいて未だ結果の得られていないものについては、そこからさかのぼって運命に言及することができないのである。探し求めているが、そして何を探し求めているのかもわからないのであるが、発見するものは何も見つからない。場合によっては、それは既に目の前にあるのだが、本人は全く気付いていないということであるかもしれない。それはまさにラカンの言う現実界であって、発見されることを拒否しているのかもしれない。

つまりここにあるのはどうしてもシニフィエと結び付くことのない浮遊するシニフィアンであって、ラカンなら対象 a という概念で捉えるだろう。この浮遊するシニフィアンは、整合性を持った象徴的世界を乱す存在であり、例えば結果が見えた段階で、そこに垣間見える運命を整合性を伴った形で捉えるならば、それはありふれた決定論を目の前にすることになる。未だ結果がわからない段階で運命を捉えようとすると、どうしても収まりの悪い形になってしまう。未だ出現していない未来をあたかも既に終わってしまった過去の形で捉え、表面的に収まりのいい形で運命を理解するためには、精神分析の助力を借りて、本当のところどうあって欲しいのかを明らかにする必要がある。つまり時間を逆行させるために、神の意思ではなく、欲望によって読み換えることを試みるのである。

第二部　シュルレアリスムと浮遊するシニフィアン

第五章　浮遊するシニフィアンとしてのマクガフィン

ヒッチコックはトリュフォーとの対話の中において、映画の中で使われるマクガフィンについて語っている[4)]。それではマクガフィンとは何か。これは全くの見せかけであって、実は何でもないものなのだが、人々の欲望をかき立てる原因となるものである。人々の欲望をかき立てるのであるから、これを中心に物語は展開されることになる。実際ヒッチコックの映画の中にはこのマクガフィンが数多く登場することになるのであるが、ここにおいては『北北西に進路を取れ』を取り上げよう。映画の内容を事細かに説明する必要はないので、マクガフィン＝浮遊するシニフィアンを中心に、それが出現するに至る経緯を記しておこう。まず前提として CIA はソ連の諜報機関を騙すためにジョージ・カプランという架空のスパイをでっち上げた。このカプランなるスパイは存在せず、これは後になってわかることだが、別にいるスパイの活動を見えなくさせるために作り上げられたのである。そのカプランというスパイはあるホテル

に部屋をとっていて、ソ連のスパイたちはそのホテルで張り込んでいればカプランなるスパイを見つけることができるはずだと考えたのだ。そこに全くスパイ活動とは関係のない、広告業者のロジャー・ソーンヒルという人物が現われる。たまたまホテルのロビーにいたのだが、母親に電報を打とうとしてホテルのボーイを呼び止めた時に、ちょうどカプランに電話があったことを告げるボーイが現われ、電報を打つためにボーイを呼び止めた仕草がカプランにかかってきた電話を受け取る相手と勘違いされてしまう。つまりソーンヒルの仕草は、「私がカプランです」と言ったようなものだったのだ。そこでソ連のスパイたちはソーンヒルをカプランだと思い込み、ここから事件が展開していくのであるが、後のことは当然割愛する。

ここにおいてカプランなる人物は存在しないのであるから、あるのは名前だけである。実際にカプランなる人物が別にいて、何らかの偶然からソーンヒルがカプランと間違われたということではないのだ。実際名前だけの存在であるにも拘らず、CIA はソ連のスパイ活動攪乱のためにカプランなる人物をあたかも実際に存在するかのように偽装を行なうわけであるし、ソ連のスパイたちもカプランなる人物を突き止めてその活動を明らかにし、場合によっては妨害工作を企てるということにもなるだろう。つまり CIA とソ連はともに自らのスパイ活動という目的で動いているのであるが、そこに介在している人物というのは実は不在であったということだ。不在であるにも拘らず、ここまで人を動かすことができるということで、カプランなる名前はマクガフィンの役割を十分に果たしているということになる。

ちなみにドゥルーズはこのような役割を果たす記号らしきものを「脱標識」と呼んでいる[5)]。ラカンならこれを対象 a と呼ぶであろうが、実体を持たないか、仮にあったとしてもそれ程重要性を持つものではなく、それにも拘らず相互主観的な関係であたかもあるかのように機能するのだ。実体がないとか、何ら根拠がないにも拘らず、それに関与する人たちの欲望を刺激するのだ。CIA からすればカプランなる人物は存在しないのであるが、ソ連のスパイたちを攪乱させるためにあるかのように行動するわけだし、あると思って欲しいのだ。また一方でソ連のスパイたちは名前がある以上その人物を突き止めなければならいということから、早くその人物を特定したいということになる。つまりカプランなる名前は、実体を欠いていても十分に欲望の原因となる対象なのだ。

ここにおいてカプランなる人物が本当は存在しないとわかっているのは CIA ということになるが、ソーンヒル自身にしてみれば、カプランなる人物は他にいて、自分はただ間違われただけだということなのか、あるいはカプランなる人物は存在しないということには最終的にはわかるにしても、途中の段階で薄々気付くということになるかもしれない。問題なのは、ソーンヒルにとってカプランなる名前はそもそも実在しないのであるから、そしてソーンヒル自身スパイではないのであるから、何の意味もないといって退けてしまえるかというとそうではないということである。つまりソーンヒルにとって、カプランなる名前は自らの運命を示す記号となるのである。自分にとっては何の意味もないと思っていた記号は、実は自らの欲望を抑圧していたために気付かなかっただけであり、本当のところは大いに関係があるのだ。しかし抑圧していたものに接近することは危険を伴うわけであって、実際ソーンヒルは様々な困難に出遭うことになるのだが、最終的には最愛の女性と結ばれるという結末に至る。つまりカプランと

いう名前は、困難を乗り越えることによって最愛の女性へと至る標識の役割を果たしているのだ。そのためカプランという名前を実体を欠いたシニフィアンにすぎないとして無視することはできない。むしろその名前に刺激されることによって、自らの欲望をかえりみて、自分は一体何を欲しているかについて答えなければならないのだ。それを安易に別のシニフィアンを持ってくることで対応してはならない。

この浮遊するシニフィアンとは当然何を意味しているのか知ろうという欲望をかき立てるものであり、従って象徴的枠組みに入ることを求められるのであるが、同時にシニフィエによって安定した状態に落ち着くことを拒否するのである。この事態を捉えてみるならば、およそ構造主義的であるとは言えないだろう。そのため分析するには、象徴的構造の中に例えばラカンの言う対象 a のようなものを位置付けるということをしなければならない。もちろんこの対象 a は捉えたと思ってもすぐに手の間から滑り落ちてしまうようなものであるので、象徴的枠組みの中には収まり切れないのであるが、それは同時に様々な意味を生産していく解釈を可能にするわけである。

このように理解した上でブルトンのテキストに目を向けてみるならば、例えば自動記述の作品としての『溶ける魚』を対象にして考えるならば、テキスト 7 に「指輪」、テキスト 9 に「手」、テキスト 10 に「箱」、テキスト 16 に「雨」、テキスト 19 に「泉」といったように、様々な言葉が出てくる。これらは決して網羅的ではなく、敢えて言えば各々のテキストにおいて中心的と思われるものを選んだだけで、もう少し範囲を広げるならいくらでも増やせるだろう。これらは解釈を拒むように存在しており、それは既に承知しているのであるが、全体として流れを捉えてみるならば、いずれこの論考においても明らかになってくる一つの流れのようなもの、別の言い方をするならば、ブルトンにとっての主体らしきものが見えてくるはずである。もちろんそれが唯一の正しい解釈であるというわけではなく、むしろ重要なのはその言葉から何を読み取りたいのかということなのだ。つまり問題となるのは、その言葉の中立的な意味ではなく、その言葉を媒体にして自分自身意識していなかった欲望に目覚めることなのである。読んでいるつもりが読まれていたといったところだが、数多くのシニフィアンの連鎖と関わることによって、結局のところ自分に命中するシニフィアンに遭遇することが目的であって、一見何の意味かわからないシニフィアンの連鎖を通過することによって、真の目的である自分自身に到達するという本来の目的を達成できるわけである。そしてこれは一回性のものではなく、というのもシニフィアンの連鎖を通過して自分自身に戻ってきた時点で、既にそれまでの自分自身とは異なっているわけで、その以前とは異なった自分自身が再度シニフィアンの連鎖に遭遇することによって生じる循環運動が維持されるのである。マクガフィンのように実体を持たず意味のないことが重要なのであって、仮に意味を与えられるとすれば、象徴的世界は整合的で固定化されてしまい、映画的物語はそれ以上進化しないということになってしまう。意味を固定化することは欲望を抑圧することであり、精神の自由である想像力の発揮を禁止することになってしまう。これこそシュルレアリスムを標榜するブルトンの忌避すべきことであり、したがってブルトンは一見意味を持たない浮遊するシニフィアンを提示することで欲望を刺激するのだ。

第六章　主体の欲望

第五章で持ち出したヒッチコックを再度持ち出すなら、ヒッチコック自身がどうかはわからないが、彼の映画やテレビドラマに登場する男性はかなりのマザコンである。例えば、ある男性が理想とも言うべき女性と出会い、結婚という段階になった時、いささか意地悪く独善的な母親が登場し、結局のところその男性は女性を殺し、母親を選ぶというのがある。何故彼は殺人を犯したのかについて、それは彼がマザコンだったからだということになる。マザコンという概念は一般的で、何ら特別な概念であるとも思われないが、問題なのはどうしたのかではなく、何故そうしたいと思ったのかであって、精神分析はそのことを教えてくれるのである。ここにおいて重要であるのは何も欲望の対象が母親だということではなく、母親の承認の下で認められた欲望ということであり、要するに相互主観的なのである。

これは、誰それが持っているから自分も欲しいというのではなく、他の人が欲しがるようなものを欲しいということなのである。従って先のヒッチコックの例で言うなら、いくら男性がその女性のことを気に入っていても、母親が気に入らなければその女性は必要ないのである。あるいはブランド物を買い求めるというのは、みんなの憧れのものを持っている自分が好きということであり、そのブランド物自体が好きということではないのだ。ところがこのような構図で捉えられる欲望には限界があって、要するにみんながいいと言うものしか認められないということなのである。自分が本当に求めているものはどうなるのかということである。

これを考えるのに適切であると思われるのは、ハードボイルド小説における人探しという設定である。この原型とも言うべきは中世の聖杯探求物語が考えられるのであるが、探し求めるものが聖杯である以上価値あるものなのだが、一方ハードボイルド小説において探し求められる人物は別に徳の高い聖人君子というわけではなく、むしろ正反対の存在である。レイモンド・チャンドラーの『さらば愛しき女』において、探偵のフィリップ・マーロウは偶然知り合った大鹿のマロイに、昔つきあっていた（と本人が思っている）ベルマという女性を探してくれと頼まれ、仕事に取り掛かるのである。このベルマなる女性はマロイにとっては素晴らしい女性なのであるが、物語の結末において明らかになるように、あまり人徳のある人物ではなかったのである。そういう女性を素晴らしいと捉えていたわけであるから、マロイ自身錯覚していたということなのであるが、それが可能になったのは、マロイ自身があまり他人の意見を聞くような人物ではなかったということなのだ。つまりここにおいて欲望が成立する前提としての相互主観性が欠けていたということなのだ。

もっともこのような強い欲望があるということが物語の始まりを決定付けるのであるが、このハードボイルド小説を欲望という観点から読み直すなら、大鹿のマロイの欲望が維持されながらも、最後には消滅してしまう、もしくは求めていた女性に最後は殺されてしまい、その事実に瞬間的にせよ気付くわけであるから、欲望の充足の不可能という事態に至るまでの物語ということになるのだ。欲望の消滅という終点に向かって書かれているため、物語として成立しているわけであるが、ある意味無茶とも思えるマロイの欲望が物語を生じさせるのは、探偵のマーロウ、更にはこの小説の読者との間に相互主観性が成立しているからに他ならない。よく小説や映画で孤独な人物が描かれ、孤独で誰にも理解されない人物として描かれているにも拘

らず、決して負のイメージで捉えられないのは、読者や観客である我々との間に相互主観性が生じているためなのである。

従って欲望という次元で物語を捉える場合問題となるのは、誰によってどのような視点から読まれるのかということである。ここにおいてまず前提として指摘しておかなければならないのは、恐らく中立的な立場は存在しないだろうということなのである。例えば黒澤明監督の『羅生門』において、各人による証言が映画を構成しているわけであり、最後に出てくる志村喬演じる地元の杣売りの証言が正しいと思われるのだが、これでも偽りの証言の疑いがある。映画の最後で、羅生門にいた鬼さえ逃げていったというくらい人間とは恐ろしいものだという、千秋実演じる旅法師の台詞で締め括られるわけであるが、この映画に対して視点の多様性が指摘される。つまり誰の証言が正しいというのではなく、各人の立場によるものの見方があるということなのだ。これをより正確に言うなら、各人には欲望があって、その欲望に沿うように解釈され、場合によっては事実も歪曲され捏造されているということなのだ。欲望のない主体というものは考えられないから、これは全ての人に当てはまるということになる。そして更にこれらの各人の証言に対して、誰のが正しいとか、誰のは間違っているという考えも示されることになり、その際根拠というものも示されることになるだろうが、このような事実との間の距離をまとめて捉えようとするところに生じるのがイデオロギーである。

イデオロギーでもって語ることは単純化されてわかりやすいが、画一的になり細かな違いが無視されてしまう。例えば各人の証言をそれぞれ権利といった概念で語り出すと、実にわかりやすい構造になる。もちろんイデオロギーでまとめられたとしても各個人は存在するのであって、実際のところはそれをいかに解体していくかということに欲望は向けられるだろう。ここにおいてデリダが有効になるのだ。つまり同じイデオロギーで語られるとしても、そこには差異が生じるということである。というのも同じイデオロギーの下にいたとしても、それでも各人の思いや考えはそれぞれあるということである。ところがイデオロギーのためには、このような内在的な逸脱はあたかもないかのようにしなければならない。というのもこのイデオロギーは恐らくフーコーの言う権力を目指すものであり、外部からの抵抗というものは当然予期されているであろうが、内部からの抵抗というのは、権力と反権力という形を取る以外は、結局のところ内部から分裂しているということになってしまう。ここにおいて問題になってくるのは、イデオロギーというのは相互主観性が依って立つ枠組みであるということだ。本来各自が思っているところを明らかにし、そこにおいては邪心なく、かつ理性的に、更には民主的に意見交換されなければならないのであるが、そのような状況において容易に相互主観性が成立するわけがない。たとえ表向きであったとしても、人々の心を捕らえ、それを支配する権力がイデオロギーを必要とする時、何か邪な部分に依存しなければならないのだ。もちろん表向きは、それは抑圧され否定されることになる。ただ否定されてはいても、実はその権力の基盤となるイデオロギーの根幹をなしていて、仮にそれがとりあえずはまともに機能するとなると、あってはならないし、あるはずもないという身振りを続けなければならない。そしてこの邪な部分こそ欲望であり、ラカンの言う現実界なのであって、相互主観性はこの欲望と密接に結び付いている。この相互主観性が成立するためには、本来自分の思っているところがあり、他者の主

観性と結び付いてというように考えられるはずであるが、どう思おうと自由であるという形を取りながらも、実はどのように思わなければならないかは既に決定されているのだ。自らは自由に選択できるとしながらも、どういう選択をしなければならないかは、自分に課された義務であって、つまり相互主観性は自分の思いとは別のところで既に成立してしまっていて、後は自分もそのように思うということを決定付けられているということである。

第七章　他者の欲望と相互主観性

初期ラカンは、あたかもヘーゲルのように承認を求める闘争という概念でもって相互主観性を捉えていたのであるが、中期を経て後期に至ると、ラカンは相互主観性という概念の価値を批判的に下げ、ついには放棄してしまうのであるが、これは他者の認識が正確に把握できないということにも起因していると思われる。

ここにおいてラカン自身が提示した囚人の論理ゲームを持ち出してくることによって、その問題についての手がかりを得ることができるだろう。ある刑務所において、三人の囚人がそのゲームの対象となる。そのゲームとは、ここに５つの帽子があって、そのうち３つは白、残りの２つは黒であって、いずれかの帽子を囚人はかぶらされる。囚人たちは三角形の位置に座らされていて、他の二人の帽子の色が何であるかはわかるが、自分の帽子の色はわからない。このゲームは、自分の帽子の色を最初に当てることができれば、文字通り刑務所から出ていくことができて、放免されるわけである。ゲームとはいえ、自分の人生がかかっているということで、囚人たちは真剣である。まず簡単な場合から考えてみよう。ある囚人から見て、他の二人の囚人はどちらも黒の帽子をかぶっている。黒の帽子は二つしかないから、当然自分の帽子は白であるとわかることから、その囚人は直ちにその刑務所から立ち去ることになる。予め考えていれば、それこそ瞬間的にわかるし、そうでなくてもしばらく考えればすぐにわかる簡単な推論で対応できる。次にもう少し難しい場合を考えてみる。その囚人から見て、他の二人の囚人は白い帽子と黒い帽子をそれぞれかぶっている。ということは、自分の帽子が白か黒のどちらかということで、その時点ではよくわからない。しかし仮に自分の帽子が黒であるとするならば、白い帽子をかぶっている他の囚人から見れば、黒い帽子をかぶっている囚人が二人いることがわかり、先の例で見たように、自分の帽子は白であると直ちに判断して刑務所を出ていくはずである。ところがその囚人はそうしないということは、自分の帽子の色が白であるとわかるというわけだ。ここでは先の例とは違って少し時間がかかる。それに必要とするのは、白い帽子をかぶっているもう一人の囚人の態度というか、それに先立つ形で存在する判断であって、それに基づいて自分は判断しなければならないということである。ただ先の例で言うと、直ちに判断できるような推論が存在するかどうかであるから、少し難しいとはいえまだ簡単ということは言えるかもしれない。ところが問題は三番目の場合である。ある囚人から見て、他の二人は白い帽子をかぶっている。さて自分の帽子が黒だとして、残りの二人の囚人はそれぞれ次のように考える。自分の帽子が黒であればもう一方の囚人はこの黒の帽子を見て、自分のが白だと判断し、直ちに刑務所を出ていくはずであるが、どちらもそのようにしない。ということは、自分の帽子が黒だと仮定したことは間違っていて、実際は白だということである。白

だとわかれば当然立ち上がって刑務所を出ていこうとするはずであるが、仮に三人の囚人の認識能力と推論が全く同じ程度であれば、それこそ同時に反応するはずであって、その時疑念もまた生じるのであって、つまり立ち上がったのは黒い帽子を二つ見て自分のが白だと判断したのか、三人とも白だと判断したのかがわからないということである。他の囚人は必ずしも自分と同じように考えているとは限らないし、考える時間も同じとは言えない。考える時間の差が間違った判断に行き着くことにもなるのである。ここで指摘しておかなければならないのは、自分の帽子が黒であるとすれば、他の囚人は直ちに自分のが白であると判断して立ち去るであろうという、他の囚人の判断の中には既に私自身（当該の囚人）の存在があり、私は常に既に見られた存在として他者の判断を捉えることになるのだ。そして三番目にあるように、自分の帽子が白であることを判断するためには、自分の推論だけで成立するのではなく、必要不可欠な要因として他者の判断が前提とならなければならない。

そしてこれとは別に、一般に知られている囚人のジレンマという論理ゲームがある。内容的には同一のものだが、量刑については少し異同がある。A と B が共謀して犯罪を行ない、逮捕される。取り調べにあたっては、AB 別室で行なわれたのだが、刑事は事件解決に向け AB 二人に取引を持ちかける。二人とも黙秘していれば、二人とも懲役 2 年となる。ところが共犯者が黙秘していて、当該犯人だけが自白したなら無罪となる。ただし共犯者は懲役 10 年となる。これは逆も言えて、共犯者と当該犯人の立場が入れ替わることになる。そして二人とも自白したら、どちらも懲役 5 年となる。ここにおいて自分はどうすべきかという問題である。この問題についてはどう解答していくかというと、AB ともに自白するか黙秘するかを表の形にして場合分けして考え、相手がどちらを選ぶかに関わらず、自分は自白した方が得であるということになる。ここにおいて共犯者との信頼関係が崩れるのではないかという配慮はなく、ただひたすら自分の量刑が軽くなることだけを考えて行動するという形になっている。ゲームの理論としては tip tap 理論というのがあり、裏切って得をするということがあっても、結局はそのことで信用されなくなり、相手にもされなくなることから、長い目で見れば他人を裏切ることなく、信用第一で行動することが特になるのだと教えている。

このようなゲームの理論とは別に、ラカンが問題にしているのは、自分の帽子の色が白であれ黒であれ、予め与えられているものだとしても、それを他者を通して認識し、自分の帽子の色を明らかにすることで行動に移し、その時点で主体となるということなのである。つまり他の囚人からあなたの帽子の色は白ですよとか黒ですよと教えられて、初めて理解するというのではなく、あるいは何もわからず、当てずっぽうで白だ黒だと決めつけてフライング的に突っ走ってしまうのではなく（とはいえ根拠なき行動も実際にはありそうだが）自分自身の内部において自己を形成していく際に、他者の判断が必要になってくるのであって、自分自身いくら論理的に対処しようとしても、単純な事柄である帽子の色を確実なものとして決定することはできないのだ。そしてここで更に問題になってくるのが、推論に使う時間であって、これは早いとか遅いとかいうことではなく、最終的に主体が生成されるまでの間は何が何であるかについて不安定で不確実な状態に置かれるわけであって、自分が論理的に対処し理性的であるとしても、自分について決定することはできないということなのだ。構造主義的な考えによるなら

ば、記号という象徴的体系の下、自分の予め定められた場所においてその空白を埋めていくということになる。しかしラカンの考えによれば、自分に白い帽子や黒い帽子を与えられただけでは十分ではない。周囲の状況を見て、その場にふさわしい自分の立場を明らかにしなければならない。確認するのではなく、周囲の状況を見て推論し、私が何であるかを明らかにする必要があるのだ。もちろん私の帽子は白であるということは、何も私の本質を明らかにするものではなく、本質からは程遠いただのシニフィアンなのである。そのことを承知した上で、私のその社会における自己同一性は確立されるのである。もちろん帽子の色が白であろうと黒であろうと何ら関係はない。そのため黙っていては白でも黒でもどうでもよくなってしまう。重要なのは、私の帽子の色は白いと表明することによって、他者の承認を得るということなのである。他者との間に相互主観性が生じるというのはそういうことなのだ。

第八章　他者の欲望と欲望における他者

ヒッチコックの『バルカン超特急』（原題は「女性が消える」）にしても、コーネル・ウールリッチ（ウィリアム・アイリッシュ）の『幻の女』にしても、奇妙であるのは、と言いながらもそれがまさに現実なのであるが、主人公のどんな訴えに対しても他者の意見の方が信用されることである。あたかも他者はこの現実において不動の位置を占めているかのようである。事実というか真実は主人公の側にあるのに、気が狂ったか嘘をついているかのような扱いを受けてしまう。それに対して他者とは一人ではなく複数存在し、内容としては全く嘘であるにも拘らず揺るぎないものがある。つまり相互主観的な共同体は、主人公の言っていることが事実ではないかのように振る舞うのである。

どうしてこのようなことが可能になるのか。同じようなことは、ジム・キャリーが主演した『トゥルーマンショー』にも見られて、主人公を取り巻く世界は全て作られたものであって、それをまた全ての人がテレビのドラマとして見ているという構図である。ところがある時何か奇妙な点があることに主人公は気付くのだが、周囲の人たちは修復しながらも問題が起きないようにするのである。ここには何か本質的なものがあるように思われる。更に別の例を挙げるなら、『裸の王様』という童話において王様が裸であると最後に子供は指摘するのだが、そのことを他の大人たちは知らなかったのか。そんなことはない。知っていたけれど知らない振りをしたというか、それに留まらず王様の服は素晴らしいとまで言ったのである。ここにおいて大人たちは実は王様は裸であるということを知ってはいたが、それを口にすることははばかられる雰囲気があるのを察知し、周囲の人たちと同調するような形で王様の服は素晴らしいと言ったのか、あるいは裸かどうかについてはどうでもよくて、本心から王様の服は素晴らしいと思い込んでそれを口にしたかというのが問題になる。

現実によくあるのは、状況の変化によって言っていることが正反対なのだが、言っている本人はそのことに気付いているかどうか気にする風もなくいたって真剣というのがある。このような現象を倫理的に見てどうかと問題にするよりもむしろ重要であるのは、何故このようなことが可能になるのかという背後にある力のようなものについてである。『バルカン超特急』においては、その老婦人はスパイであったということで、敵国のスパイ組織の働きがあったからだ

とわかるし、『幻の女』については、真犯人による買収があったためだということになる。これなどわかりやすい理由で、それは物語として成立する必要な要素であったと考えられるのであるが、『裸の王様』についてはどうか。今の国王を守るために、あるいは王制を維持するために、王様は実は裸であるのだが、そのことは口にしてはならないというお達しが出ていたかというとそうではない。そもそも王様は裸であるという認識自体存在していないのだ。事実関係で見るなら、『バルカン超特急』の老婦人は最後には再び現われて、若いイギリス人女性の言っていることは本当だったとわかるし、『幻の女』については、殺された主人公の妻は戻ってこないとしても、主人公が自分が殺したのではないという事実は明らかにされる。変わったのはむしろ相互主観性を形成していた他者の方で、このような状況において主人公の側が頼るべきものがあるとすれば、他者の他者としての大文字の他者以外には考えられない。

しかし大文字の他者は存在し、有効に機能するだろうか。マルクスが『資本論』において指摘しているように、王はもともと王としての特質があるのではなく、臣下が彼を王として扱うからだとして、ラカンも同じような趣旨のことを書いているわけだが、仮に王を失脚させたいと思うならば、何も王自身を殺害するのではなく、王を王たらしめている社会関係を形成している相互主観性を崩壊させればよいのである。このことによって事実は事実として明らかになり、認識されるようになる。このように誤った相互主観性を解体させてしまえば、事実は事実として至極当たり前の様相を呈するようになる。

ここまで来ると、事実と逆行するようなことを何故認める必要があったのか、どういう力が作用してそれを可能ならしめたのかということが問題になってくる。つまり事実があって、その事実に基づいた象徴化が行なわれるのではなく、つまり事実に基づいた証言が為されるのではなく、事実とは全く逆の証言が可能になるのは何故か、何故そうする必要があったのかということである。ここにおいて現われるのが他者の欲望であって、その対象となるのが、つまりはもともとはどうでもいいような物なのであるが、ラカンの言う対象 a なのである。それは大したものでなくてもあるいは実体のかけらのようなものでなくてもよくて、例えば『裸の王様』で言うなら、それらしきものすらなくて、敢えて言えば仕立て屋たちが口にしている服という言葉＝シニフィアンだけである。それでも他者の欲望をかき立て、その受け皿となるには十分であって、重要なのは他者の欲望の方なのである。ところで、『裸の王様』において話は子供が王様は裸であると指摘することで終わるのであるが、その後の話を考えてみたらどういうことになるか。『裸の王様』は一種教訓的な読まれ方をしていて、大人たちは利害や思惑に左右させられているが、子供は純真な心を持っていて、真実を見抜くことができるのだという意図を理解しなければならないとすると、大人たちはその子供の声にはっと我に返り、自分たちの不明を恥じたということになるのであろうが、逆に子供は大人たちを中心にして形成している相互主観的な社会を崩壊させようとしたとんでもないガキだということで、罰を受け、その後大人たちは何事もなかったかのように王様の服は素晴らしいと言い続けるというものである。

他者の欲望が消えることはないから、大文字の他者がどう機能するかということである。ジル・ドゥルーズ＝フェリックス・ガタリの『ミル・プラトー』において、フランス革命の始まりというのは世界史の教科書レベルで様々な説明がなされているが、フランスの社会学者ガブ

リエル・タルドは「どの農民が、そして南フランスのどの地域で近所の地主に最早挨拶しなくなり始めたのかを知る必要があるだろう。」（MP p.264）と主張していると書かれている。

つまり個人の次元で何か考えているとか、何かするとかいうことがあっても、それを可能にするためには、周囲で、もしくは背後でどのような動きがあるかということが問題になるのであって、それこそが大文字の他者の存在を物語るのだ。「そしてタルドによれば流れとは何なのか。それは信念あるいは欲望であり（中略）流れは常に信念と欲望なのである。信念と欲望は社会全体の根底である。」（MP p.267）つまりある農民の行動とはある流れが顕在化した現象であって、それが可能になるためには、ラカンにとっては欲望の存在が前提となるわけである。従って事実があって、それを主張しているにも拘らず、何ら認められず、むしろその事実に反する認識が他者の間で広まっているという時、それはまさに事実を認めたくないという他者の欲望が存在しているということであり、またその他者とは一人二人の話ではなく、数多く存在するということである。このような欲望が存在し、それに基づいて相互主観性が生じているのがまさに現実であるとするなら、現実を否定するブルトンはどのように相互主観性を逸脱し、私自身の欲望に従い、自らの主体を確立するのであろうか。

第九章　「新精神」の謎の女性

「新精神」に登場する謎の女性は後になって『ナジャ』として結実すると考えられるような存在なのであるが、決定的な程大きな違いとしては、接触がほとんどなくよくわかっていないということがある。もちろんナジャに関してもよくわかっているというわけではないのだが、「新精神」の謎の女性は結局のところ見かけただけにすぎないのである。この女性については、ブルトンだけでなく、ルイ・アラゴンやアンドレ・ドランも遭遇していて、かなりの感銘を受けたということであるから、それなりの存在感は持っていたようだ。とは言っても直接話したわけでもなく、また街の女性については詳しいアンドレ・ドランでさえ知らないというくらいであるから、見かけたことがあるとかその後街中で会ったことがあるというのでもないのだ。要するにその時に見かけただけということなのだ。こうなると、一度見かけただけの存在であり、まさに不在の女性ということになる。そして不在であるが故に、その空白を埋めるという行為が後に続くことになる。この空白を埋めるという行為については、想像的次元であればそれこそ似たような女性を探すとか、その女性を見かけた街を歩くことによって思い出に耽るということになるだろう。ところが象徴的次元でこの空白を埋めようとするとどうなるか。ブルトンにとってこの謎の女性は欲望を引き起こす対象でありながら、最早不在の存在であり、空白の場を提供しているのだ。これはまさしくラカンの言う対象 a であって、ブルトンの象徴的世界においてはそれを肯定的に捉えるようになる。ラカン理論によれば、まさに存在しない女性である。このような女性が存在しないということは、他者にとっての相互主観性に捉えられないということである。既に示した『バルカン超特急』や『幻の女』において、他者の相互主観性がそのような女性はいなかったと証言することと同様である。従ってこの謎の女性について語ることは、ブルトンの幻想的観念であるかのように機能する。ところがこの話の魅力は、結局のところその女性は実際に存在したということなのである。『バルカン超特急』において問題と

なっている老婦人は敵側のスパイに捕らわれていただけで、最後には再び現われるのだし、『幻の女』についても実際にそのような女性がいたということが明らかになる。「新精神」においても、たとえ見ただけにすぎないとしても、ブルトンの勘違いとか幻覚というのではなく、友人のアラゴンやドランも見ていたということなのだ。いそうもないけれど実際にいたということが、我々の意図するところと合致するのだ。

これを解釈して合理的説明にするためには、他者の相互主観性に反対してというか逆らって自分の考えを貫き通して正解だったというものである。仮にその正しさが証明されなければ、他者による相互主観性から成る共同体から排斥されるところだったのだ。しかし肝心なことは事実は事実であったという至極当たり前の結果をもたらしていて、幻想でも幻覚でもなかったということなのだ。従ってラカンの言う大文字の他者は、最終的に老婦人が存在し幻の女も存在することを認めるに至るのだ。ところが「新精神」の謎の女性については、実際にブルトンたちが出遭ったにも拘らず、大文字の他者はあたかもその謎の女性が存在しないかの如く操作しているように思われる。つまり大文字の他者は、謎の女性が実際にいたのに、そしているはずなのにあたかもいないかのようにしていると思われるのだ。このように謎の女性とは、実際には存在するのだから、関わりを持つことができるようでありながら、普通にいる女性ではない儚い幻影となるのである。

ここにおいてラカンの言う女性は存在しないというテーゼは成立するのであって、そのためその謎の女性との関わりはないのだと認めざるを得ない。理想の女性を求めても、それは単なる空想の産物というわけではなく、実際にいたではないかというのがブルトンの意識の中にはある。ところがいくら探しても見つからないし、アンドレ・ドランの意見によれば街の女性は全て知っているから、いるはずもない女性ということになってしまう。つまり謎の女性とは近付くことが禁止された存在であり、近付こうとしても存在しない以上不可能なのである。このため女性との関係は昇華され、その謎の女性は崇高なイメージで捉えられることになる。ラカンの考えるように、ここにおいて対象となるのは空無な存在であり、いわばその周りをぐるぐる回っているようなものなのである。そしてこのことによって、その空無は不可能な欲望の具現化として機能するようになる。このようになると、謎の女性がもたらす幻想が現実を支配するようになる。この謎の女性が占めていた空白を埋めようとするなら、謎の女性に勝るとも劣らない別の女性を探すか、あるいはその空白を占めていた謎の女性の正体とは極めて下品な厚顔無恥な女性であるということを思い知らせるような、崇高な魅力を完全に拭い去ってしまうような女性の出現に遭遇することになるかもしれない。

この二者択一は必ずしも二者択一として機能するのではなく、現実にいる女性がそのような崇高な理想を体現する存在であるわけがないという現実に直面する事態となる。従って二者択一を正しく表現するなら、理想的な愛の対象といった女性のイメージを維持しつつ、ただそのような女性は現実には不在であることから、それはその昇華の過程において詩作に向かうか、あるいは理想とはおよそかけ離れた現実の女性との関わりによって、主体において整合性を得ていた幻想的空間が崩壊してしまうことに甘んじるかである。仮に謎の女性が不在の存在となるのではなく、現実にブルトンと関わりを持つようになるなら、幻想を支えていた対象は逆に

失われることになるだろう。つまり謎の女性とは謎でも何でもなく、要するに何者でもなかったのだ。そうなるとブルトンは幻想の世界を成立させていた謎の女性自身を見失うと同時に、幻想の世界それ自体も失ってしまうことになる。つまりただ単に不在であるということなら、まだ幻想の世界を維持できたのだが、実際はつまらない女性だったということになれば、ブルトンの欲望を充たす謎の女性の不在をも喪失させてしまうことになるのだ。そしてここにおいて問題にしなければならないのは、謎の女性の不在以前のこととして、謎の女性の出現によって我々は何に気付かされるかということなのである。つまり鞄を失くしたとか財布を失くしたとかいったようなことにおいて、鞄なり財布なりはあって当然で、かつ大事なものであるので失くしてしまうと大変なことになるというのとは別に、謎の女性はこの現実に存在して当然というわけではないのだ。むしろ存在して不思議とでも言うべきであって、だからこそ謎の女性として捉えられるわけであるが、このことは他者についての、あるいは他者がもたらす象徴的秩序において、謎の女性はそもそも存在していないということを前提としている。多様性とは逆のある意味画一的な世界観が展開されていて、ラカンの言う現実界のわけのわからなさそのものである。ところがそのような世界観を打ち破るような形で、謎の女性が出現したわけであり、つまりそれは明らかな反証である。存在するというまさにその一言によって捉えられる現象であり、そのことは既にある現実の世界と何の違和感もなく成立しているわけで、これこそ本来あるべき姿であるとして、主体とその対象は相互に承認し合うこととなる。ところがそれは幻想かもしれないということで、何も不可思議な世界を現実化しようとしているのではなく、あくまでごく自然と思える主体の欲望が何故現実においては幻想としてしか成立し得ないのかという疑問が出てくるのであり、ここにおいてナジャの問題を扱うことになるのだ。

第十章　ナジャの問題

『ナジャ』において、ブルトンはナジャと毎日会うという生活を続けた後、ナジャについて一体どういう人物であるかを問いかけるのだ。つまり霊感に富んだまさにシュルレアリスムの具現化とも言うべき存在なのか、それとも最低の街の女なのかということである。この問いかけについて、ブルトンは明確な解答を避けているのだが、ブルトンの答えは決まっていて、最低の街の女だというものだ。となると、シュルレアリスムの具現化された存在としてのナジャは不在であるため、ブルトンは象徴的世界において虚構のナジャを仕立て上げるのである。もちろん実際のナジャはそうではないので、シニフィアンによって埋め尽くすということになる。このように理想のナジャ像をブルトンによって押し付けられたナジャは、その理想像と自分自身意識している自分の姿との差にいらだちヒステリー状態を起こすことになる。『通底器』に記されているように、ナジャが精神病院に入る原因の一端はブルトン自身にあるのだと一時期ブルトンの愛人であったXなる女性は指摘するのであるが、意図的ではないにしてもある程度は当たっているだろう。

ブルトンによるナジャの理想化は、ナジャとは関係のないところで遂行されるのであるが、ナジャにしてみればいささか無理があるように思われる。マルクスは『資本論』において王は本来的に王なのではなく、周囲の人例えば臣下によってそのように扱われることで王になるの

だという考えを示しているが、この考えで言えば、ナジャはブルトンの言う理想のナジャとなるのか。ナジャはブルトンとサン－ジェルマン・アン・レに行った時に、城の前で貴婦人に変身するのであるが、これはナジャ自身そのように変身したというよりも、ブルトンの望みを叶えるためにそのような振りをしたというのが正しいだろう。つまりブルトンの発する言葉は、実際のナジャとブルトンによって理想化されたナジャとに二分されるのであって、その間に存在するのがブルトンの欲望なのである。ナジャにしてみれば、実際の自分とブルトンによって押し付けられた理想像との間には大きな隔たりがあって、それを補うためには言葉の世界が必要となるのであるが、それ自体もブルトンによって与えられたものであれば、ナジャにとってはその機能を十分に果たし得ないということになってしまう。

そもそもナジャは『失われた足跡』という本をブルトンから貸し与えられ、その中にある「新精神」の箇所に興味を示すのであるが、ナジャからすれば謎の女性の理想化など最初から興味はなく、ナジャは自分と同じ立場にいる、つまりは街の女としての謎の女性に対してブルトンが基本的にどういう立場でいるかを知りたかっただけなのだ。つまり街の女でも愛されるのなら、自分にも愛される可能性はあるということなのだ。ところがブルトンはナジャに説明を求められたにも拘らず、明確な答えを避けてしまう。ブルトンの本心は明らかだろう。現実の存在としては愛される可能性はなく、一方でシュルレアリスムの具現化としての役割は要求されるのだ。ナジャにしてみれば狂気で対応するしかなかったのだろうが、ナジャにとって象徴的な主体を確立するための言葉がなかったのだ。あるのはブルトンの言葉だけなのだ。ナジャは徹底して現実を拒否し、自らの世界に閉じ籠ろうとするが、一方でブルトンは言葉でもって理想に到達しようとするわけである。全く正反対の方向を向いていながら、両者は現実を忌避するという点で一致していたのである。ブルトンから見て、ナジャについては実際の存在としてのナジャと、シュルレアリスムの具現化された存在として二分して考えることができ、そのような問いかけができるということはそのための言葉を用意しているということなのであるが、ナジャから見て自分の実際の存在とシュルレアリスムの具現化された存在という二分化された言葉というものは持っていない。ナジャにあるのは、当初10月4日にブルトンと初めて出会った時の全てを了解しているという態度に見られるように、街の女とその客という関係でしかなかったし、それが出発点であったのだ。ところがそこから出発して二人の間に恋愛感情なるものが生まれてくると、ナジャにとっては愛されるかどうかという二分法しかないのだ。『ナジャ』のテキストの中には示されていないが、ナジャはブルトンに送った手紙の中で、ブルトンなしでは生きていけないということを明らかにしているのだ。ナジャがテキスト中において示されているように、時折見せるシュルレアリスムの具現化かと思われるような身振りについても、ブルトンに愛されるための、気に入ってもらうためのナジャなりの努力であったのだ。ブルトンとナジャとがあまりうまくいっていないかのように見える箇所も、ナジャがブルトンの本心を薄々感じ出したために他ならない。ナジャにしてみれば、ブルトンの気に入られるようにシュルレアリスムの具現化らしきものを示そうとするのであるが、同時に自分にとってそれは無理ということに気付くのだ。ブルトンにとって欲望の主体とは、ある種欠落した部分があり、それをナジャによって埋めていこうとするのであるが、一方ナジャにしてみれば、ナジャ

の欲望とはブルトンの欲望の対象となることであり、ブルトンの欲望が先決的に存在していなければならない。ブルトンの欲望とはナジャをシュルレアリスムの具現化された存在として捉えることで、ここにおいてブルトンが謎の女性において体験した欠落部分を補うことができる。ところがナジャはブルトンとの関係をいわば通常の男女関係として捉えていて、そもそも出発点において違いがあるのだ。ブルトンの欲望は当然の如くないことになってしまう。ここにおいてブルトンの欲望がなくなるということは、ブルトンが求めている意味のナジャは存在しないことになってしまう。これはまさに「女性は存在しない」というラカンのテーゼを証明する形になってしまう。ナジャにしてみれば関係の打開というか修復を考えるのであるが、それが不可能であるのはブルトンが別の方を向いているからである。仮にブルトンがナジャを受け入れるとすれば、その時点でブルトンはシュルレアリスムの具現化を諦めているのである。ナジャが時折見せる、ブルトンが喜ぶシュルレアリスム的言動は、そのように見れば見えるというものであって、文字通りシュルレアリスムの世界がそこに垣間見えるわけではないのだ。シュルレアリスムという世界は、ナジャにとってみれば自分とは関係のない外の世界であり、たまたま出会ったブルトンによって示された全く異質な世界であるため、ナジャがこのシュルレアリスムの世界に統合されることはあり得ないし、ナジャ自身も進んでこの世界の中に入ろうとするわけでもない。ナジャは自らの判断でシュルレアリスム的か否かを決めることはできないし、ブルトンの気に入られるようにシュルレアリスム的であろうとすることもできない。シュルレアリスム的であるとすれば、たまたまそうであったというにすぎず、全ての決定はブルトンにあるのだ。ここにおいてナジャは完全にブルトンに服従しなければならないのだ。このように考えるならば、ブルトンの一方的な関係のように思われるがそうではない。ブルトンにしてみれば、ナジャはシュルレアリスムの具現化でなければ困るのだ。ブルトンが『ナジャ』において示している困惑とは、ナジャに関するものではなくて、ナジャがシュルレアリスムの具現化でなければ自らの欲望を諦めなければならない事態となるからだ。もっとも謎の女性で女性の不在について学んだブルトンは、「君」として表現される唯一の女性へと向かうことになる。

第十一章　ブルトンにとって私とは何か

ブルトンによって書かれた『ナジャ』は、「私とは誰か。」（PI p.647）という問いかけで始まり、そしてこれは単に物語上の出発点として設定されたものに留まらず、ブルトンは日常的にも友人に宛てた手紙でこの私とは誰かという問いかけを繰り返している。このような問いかけに対する答えは、他者にとって私は何であるのかに他ならない。つまり私とは何かの前に、他者の欲望の方が問題になるわけだ。もちろんそれは実体として提示されるのではなく、あくまでシニフィアンにすぎない。ブルトンは『ナジャ』において、ナジャと初めて出会った10月4日の別れ際に、ナジャに次のように語りかけられる。「更にしばらくして彼女は私の中にあって彼女を感動させているものを私に言うために私を引き止める。それは私の考えの中にあって、私の言語の中にあって、全ての私の存在の仕方にあって、と思われるのだが、私の人生で最も心を動かされたほめ言葉の一つである率直さ（下線原文）なのだ。」（PI p.689）

つまりブルトンは他の人から言われてうれしい自分の特質のようなものとして率直さを挙げているのだが、そしてそのことによってブルトンの人柄も窺い知れるというものだが、問題なのはブルトンが率直かどうかという話ではなく、ブルトンがナジャから率直だと認められてうれしいということは、既にブルトンの中にあって率直さらしきものがあり、それを他者によって認められたいという欲望が存在していたということなのだ。そしてそれは率直さという言葉で全て掴み取れるわけではなく、率直さという言葉によってかろうじて追い付いていける何かであって、その何かとはブルトン自身の中にある対象 a なのである。そのためブルトンの中にあってブルトンらしさを成立させているものは常に既にあって、そこから象徴化の過程を経て率直さという言葉へと至るということなのである。つまりブルトンが率直であるかどうかという問題とは別に、ブルトンは自分の中に率直さらしきものがあって、それを他者によって認められたいと思っていたということを知っていたわけであり、欲望だけではなく認識もしていたということなのだ。現実は定義から外的なものとして措定されるが、欲望や認識といったものはそれとは関係なしに内的に既に存在しているということなのだ。

このように考えるならば、ブルトンが私は何であるかを知りたいということは、他者の欲望を見て取ることではなく、自らの内なるものを探っていけばいいということになるはずではないか。ラカンはこの既に存在する内的なものを現実界と名付けている。つまり現実とは既に与えられたものではなく、私の現実界の機能を妨害する外的障害物として現われるのであって、その意味で副次的存在である。従って現実はいわば拒絶によって形成されるのであって、ブルトンが現実世界を否定すると言う時、それは同語反復であり、物の表裏を表現したものとも言えるのである。そのためそれまでは、現実によって抑圧されていた自らの欲望を精神分析によって解明することこそ自らを解放することであり、私とは何かに対する答えを得ることでもあるのだ。従ってブルトンが『ナジャ』の冒頭において「私とは誰か」と問いかけ、ナジャの物語が終わった第三部において、無意識への依存を明らかにするのは正しいのだ。この無意識の世界はラカンによれば、言語による虚構を形成していると考えられるのであるから、内的なものを外に出すためには言葉が必要になってくるのである。このように考えるなら、ブルトンが何かとは何であるかを知りたいと思えば、他人に言われてうれしいという他人の承認を待つのではなく、言葉の群れの中から私とは何であるかの手がかりを得ればいいということになる。

原則言葉はシニフィアンとシニフィエによって成立しているのだが、ラカンの言う対象 a について言うなら、シニフィアンのみでシニフィエがない。従ってそのシニフィアンの意味を探そうとしても、別のシニフィアンが提示されるのみであり、あたかも対象 a の周りを回る循環運動のような現象が生じてしまう。これに対して、このシニフィアンが示している対象はどこにあるのかを問うことになれば、その対象は不在であるか欠落していると言わざるを得ないであろう。既に示した例で言えば、『北北西に進路を取れ』においてカプランはどこの誰かと問われても答えることができないのと同様である。カプランとは実際にいる人物を表わす名前ではなくて、最初から存在しない人物が作り出す空白を埋める名前なのである。対象となる人物が存在しないと、当初は実際には存在しているはずの人物と名前とを結び付けるよう試みるのであるが、一旦その人物との繋がりが切れてしまうと、その名前だけで機能し始めることになる。

従って浮遊するシニフィアンの論理で言うならば、特定の人物を探し出して「この人だ！」と言うことはできないのであるが、このシニフィアンの論理とは逆に、対象の論理で考えてみるならば、カプランに間違われた人物はソーンヒルという名前として捉えられることになる。ヒッチコックの映画において、マクガフィンは内容的には大した存在ではなくても、物語の展開において必要な役割を果たすとともに、大体において何らかの物として捉えられる。ところがこの『北北西に進路を取れ』においては最早物ですらなく、ありもしない人物の名前でしかない。これはラカンの言う対象としての地位に置かれているのと同様であって、ここで生じる逆説とは、本来ありもしないものを探す手がかりとしての言葉が、その過程において存在していない対象をあたかも存在するかのように見せてしまうということである。

もちろんブルトンにとっての私を形成するものは存在していないのではなく、何かしらあるということは言えるが、これだとして提示することができないものなのである。まさにラカンの言う対象 a であるわけだが、これには欲望が深く関与している。例えば自由になりたいとか裕福になりたいという気持ちがあったとして、確かに未だ自由でも裕福でもないという状態は存在するのであるが、そのような欲望を抱いている、そのような欲望があるということは事実であって、欲望それ自体が原因であるとともに、結果という対象を生み出すのである。つまり今はその対象はなく言葉だけがあるのだが、その言葉はまさに欲望の表われであって、いずれその対象を生み出すことがあるということなのだ。このことは実際に現実化されなければ存在しなかったというのではなく、欲望を抱いた時点でそれは既に存在していると言えるのだ。

ところでここで問題になってくるのは、欲望は正しく我々の意図するところを教え、対象を明確化するのかということである。例えば、ある店で何々を買いたいということがあったとして、それは本当にその物が欲しいのかというとそうではなく、結局のところポイントがたまることが目的であったということなのである。ポイントがたまれば、それで何かが買えるということで更に目的の物が設定されるわけではなく、ただポイントがたまることがうれしいということなのである。この時欲望の対象は不在であり、それにも拘らず欲望が維持されるという事実が存在する。モーツァルトにおけるドン・ジョバンニが、理想の女性を探し求めることを諦め、ただひたすら口説いていく女性の数を増やすことだけに欲望を抱いていたのと同じ構図である。このように我々がこの現実において、というのも現実を離れてはあり得ないからだが、実際に遭遇する欲望の対象を具体的に明らかにしていくことによって、そもそも何故私はこのような欲望を抱くようになったのかを知ることができ、そのことは私とは何であるかという問いかけにも答えてくれるものとなるのである。

第十二章　ブルトンにとってこの人生における使命とは何か

「私とは何か」と問いかけるブルトンであるが、これについてはそれ程の切実さは感じられない。というのも、ナジャによってその率直さを認められ満足しているからだ。つまりブルトンは自らを肯定的に捉えていて、その特質も自覚しているのだ。その中の一つに率直さというものがあり、ブルトンにとってはこれのみに留まるものではない。他の肯定的資質を指摘されれば、ためらうことなく受け入れただろう。むしろブルトンにとっての関心事は、この現実にお

いて何をすべきなのか、何をするように定められているのかということで、『ナジャ』のテキストにおいては次のように書かれている。ブルトンは個人的な趣味嗜好といったものがあり、日々何らかの出来事に遭遇することを自覚した上で、自分が他の人たちとどのように違っているのかそしてそれは何故なのかを知ろうとしていて、「他の全ての人たちの中にあって私が何をしにこの世界にやってきたのかそしてその運命に応えることができるのは私の責任であるからには私がどんな独自の使命を持っているのか私にとって明らかになるのは私がこの他の人との差異を正しく自覚する点においてではないか。」（PI p.648）

自分自身の資質や特性については時とともに次第にわかってくることであるし、その大半は既にわかっている。仮にその認識が間違っていたとしても、改めれば済むだけの話なのだ。このようにある種余裕をもって捉えることができるのは、全て自分自身が決定し得る対象であるからだ。ヘーゲルの言うように、人生は承認を求めての戦いであるということが言えるかもしれないのであるが、ヴィリエ・ド・リラダンが生きるのは召使いに任せておけばよいと言ったことに倣って言えば、承認されたかどうかは他人に任せておけばよいのである。むしろブルトンにとって使命感といったようなものがある種他人事ではなく語られているのは、それが相互主観性に基づくものであり、その相手はラカンの言う大文字の他者であったり神様であったりするからだ。初期のラカンにおいては大文字の他者が存在したのであるが、後期ラカンにおいては存在しないならば、残るのは神様だけということになるのか。

ここにおいてマルブランシュを参考に考えていくなら[6)]、例えばのどが渇いていて、目の前に水の入ったコップがあり、それを手に取って飲もうとするなら、全ては自分の意思に基づいた行為であると言えるであろう。もちろんその前提にはのどが渇いたとか、水を飲みたいとかいった欲望の存在も指摘されるだろう。ところが病気で何らかの理由によってのどが渇いているし水も飲みたいと思っているのに、自由に手を伸ばしてコップを手に取るとかそれを飲むという行為ができないとすると、そもそも最初に示したコップを手に取ってその中の水を飲むという行為自体が果たして自分の意思として可能になっていたのかということだ。つまりあたかも自由に手を伸ばしコップの水を飲むという行為も、神によって保障されたものだと考えるわけだ。人が何でも好きにできるというのは大変な思い上がりであるとするもので、これはわからなくもないというか、厳密に考えればそういうことかもしれないのだ。更に言うなら、自分の意思で手を伸ばし、コップの水を飲むということができても、他人にそれをさせることはできないし、逆もまた同様である。

従ってブルトンにとって何か特別なことがある時に、前提として神の意思が存在していることを考えに入れなければならない。つまりは恩寵の問題であって、ブルトンはナジャの物語を始める前段階において自ら体験したシュルレアリスム的と形容し得る出来事について語っていくのであるが、その時次のような但し書きのようなものを予め書くことになるのだ。「この領域において私がわかる機会を与えられたことの包括的な説明を私に期待しないこと。私はここにおいて、私の側からのいかなる働きかけにも応ずることなく、時折私に生じたこと、疑いをかけようもないやり方でもって私に起こり、私が対象となっている恩寵と失寵の程度を私に教えてくれることを苦もなく思い出すだけにとどめておこう。」（PI pp.652-653）

ここにあるものは決してあり得ない話ではなく起こったとしても何ら不思議ではない出来事なのであるが、現実的に見ればあまり起こりそうもない出来事として捉えられる。ブルトンにしてみれば普通に考えて現実に起こり得ると考えられることが実際にはそうではなく、従ってブルトンの欲望は幻想を作り出す。それは言葉によって形成される象徴的世界なのであるが、ともすれば不可思議で非現実的に思われるのは、他者の主観を通すからである。マルクスの『資本論』の中にある一節「彼らはそれを知らない、しかし彼らはそれをやっている」はイデオロギーのあり方を端的に示していて、そこにあるものは社会的現実に対する誤った認識なのであるが、それでも現実を形成しているのである。既に指摘した「裸の王様」についても真実は王様は裸であるというものだが、実際には王様の服は素晴らしいということで社会的現実は成立しているのだ。ここにあるのは誤った相互主観性であるが、イデオロギーが社会的現実を成立させ維持しているように、本当のことを口にしたところで、真実に目覚め変革が行なわれるというわけではない。しかしあたかも現実の隙間に存在するかのようにブルトンの意図するところが現実化される場合があり、その時ブルトンの欲望は他者の欲望と合致するというか他者の望むところとなるのである。これは確かに現実にそうあるものではないのであるが、ブルトンからすればあってもおかしくはない、むしろあるのが当然と思われる出来事であって、ブルトンの欲望というか指向するところは変わらないのであるから、結局のところどこで誰と遭遇するかという話になる。確率で考えてもあり得ない話ではないから、いつ現実になってもおかしくないのであるが、必ずしもそうはならないということから、後は神様次第ということになってしまう。再び『北北西に進路を取れ』を例にするなら、ソーンヒルは自分がカプランではないことを知っているし、CIA も知っているのだが、ソ連のスパイたちはそのことを知っているだろうか。ロッセリーニ監督の『ロベレ将軍』において、泥棒詐欺師のベルトーネはロベレ将軍に似ているためにレジスタンスたちが投獄されている刑務所に送り込まれるが、パルチザンたちは知らないし、結局のところベルトーネはロベレ将軍として生き、銃殺されてしまうのであるが、ベルトーネ自身自分がロベレ将軍ではないことは当然知っているのに対して、パルチザンたちは知らないということから、自らの欲望を他者の欲望に同化させることで、仮面をつけて生きることを選択したのである。ここにあるのは全て相互主観性とどう向き合うかという問題で、事実は事実として一方で確実に存在する。しかし現実はそのような事実とは関係なく相互主観性が成立していて、それで十分に機能しているのである。事実は事実として存在していてそれを知っている人たちがいるにも拘らずである。ラカンならここで大文字の他者を持ち出してきて、大文字の他者の知るところとなれば現実は変わるということになるのだが、ラカン自身後に大文字の他者を否定することを考え併せると、後は全て神の恩寵に任せるしかないとブルトンが考えたとしても何の不思議もないのである。

終章

ラカンの言う大文字の他者が最早存在しないということは、結局のところどういうことなのか。大文字の他者については十分理解できるにも拘らず、それが何故存在しないことになったのか。大文字の他者とは我々各個人の集合体を越えたところに成立する存在であって、ここで

生じてくるのは大文字の他者といういわば超越的でそれ故に公平無私な立場というものが確保されるのではなく、どれだけ多くの人たちの支持が得られるかとか、どれだけ万人受けしやすいかという次元の話になっているということである。つまり語られる事実が事実であるかどうかは問題ではなく、どれだけ他者の欲望に支えられるかということなのである。ラカンが欲望とは他者の欲望であると言う時、主体は他者の欲望の対象になってしまうのであって、そこに共存共生のための決まりみたいなものがあって、それに保証される形で主体はその存在を確保できるというのならいいのであるが、実際には安心よりも不安をもたらすことが多いかもしれない。

ドゥルーズはマゾッホについての論考の中で法についての概念に言及しているのであるが、それは大よそ次のようなものである。法は既に決定されたものとして我々がそれに従うことを義務付けているのであるが、この法の成立過程を考えてみた場合、あるべき姿としては法の精神とでも言うべき善についての考えがあり、それに基づいて法というものが作られるということであったはずであるが、今やそうではなく、善とは何かというと法に依存するものになってしまい、法に従うのが善ということになってしまった。こうなってくるとおよそ法の根拠というものは誰にも知られず、また知ろうとしても何もわからない存在となってしまうのである。罪の意識という言葉もわけがわからなくなるだろう。これはまさにカフカの世界であって、我々の存在自体が常に不確定の要因に満ちていて、自分が存在しているということ自体が既に否定されるべきこととなってしまう。

ここにおいて我々を取り巻いているのは意味を明らかにすることが不可能な空虚なシニフィアンであって、それについて説明を求めたとしても、そういうものだという答えしか返ってこないだろう。つまり別のシニフィアンによって置き換えられるということもなく、その空虚さに直面しなければならないのである。このような状況の下においては、それぞれの主体は自ら依って立つ大義を見失い、自らの欲望に依存せざるを得なくなる。ところがここで欲望とは他者の欲望であるとするラカンのテーゼが出てくる。つまり何の根拠もないものに依存するよりは、自らの欲望に正直に生きようとして、他者も切り捨ててしまえば、ラカンの鏡像段階理論からも明らかなように、自己同一性を確保することが困難となってしまう。もっともブルトンの意図するところは、全てを放棄するわけではなく、あたかも現実の隙間にある可能性に賭けるわけだし、そもそもブルトンの求めるものが現実にあったとしてもおかしくないあるべきだというのが前提とも言うべき原則なのである。ところがブルトンが自己同一性を求めたナジャに関して言うなら、恐らくはナジャ自身にとっても、そしてブルトンにとっても実際のところナジャが何者であるかよくわからないということがあり、テキストにおいても示される如く、ナジャは本当の顔というものがなくて（ナジャ本人の写真がテキストにおいて示されていないということがあたかもその証拠のようでもある）、他の名前でもって捉えられたり、あるいは自分自身偽装したりして次々と仮面を付け替えているにすぎないのではないかという思いに至る。それでは本当のナジャとは何なのかということで、仮面を取ってみるとそこには何もない、あるいはわけのわからない現実界が存在するということになるだろう。そこで残されたのが指示物を持たないシニフィアン、つまりは浮遊するシニフィアンであって、シニフィアンが形成す

る象徴的世界には外部がなく、それ自体で成立している。

ここにおいて重要であるのは、私の欲望であって他者の欲望ではないのだ。例えば個人的な趣味で何かを評価した時、他の人から自分はそうは思わないと否定されると、単なる好みの問題だけではなく自分という主体性も否定されたかのように感じる世界ではない。ましてや単なる好みの問題ではなく、理性的に対応できる領域においても何ら根拠を示されることなく否定されると、いささか不気味なことにもなってくる。ここで問題なのは、本来なら内心にあるものが外部にあるということなのだ。つまり内心においてどう思ったとかどう感じたかということが、それ自体も含めて他者によって外部で決定されるのだ。その顕著な例としては魔女狩りのような異端審問があって、内心においてあるはずもないものが外部によって決定され断罪されてしまうのである。ここにおいてマルクスが価格と価値の関係について指摘した逆説的な事態と似たような現象が起こるようになる。つまり高い評価を得ているから価格が高くなるということではなく、価格が高いから価値があるのだと評価されてしまう事態であって、これを類推的に捉えるなら、正しいから肯定的にみなされるというのではなく、肯定的にみなされるから正しいのだということである。ここにおいて指摘しておかなければならないのは、正しいかどうかの検証もないし、判断する際の根拠の有無が全く問われていないということである。こうなってくると事実として正しくあるよりは（そんなことは問題ではないのだから）、どういう評価を得るかということに腐心すべきなのである。このような事態はブルトンの望むところではなく、ブルトンは指示物を持たない浮遊するシニフィアンを提示することによって、それに共感する他者の存在に期待したということがある。つまり理解する人がいないわけではないのだということだ。そして更に言葉自体の持つ力にも期待したということがある。精神と肉体という二分法において、肉体は否定されるべきだとするグノーシス主義に傾倒していくのも一つの現われである。ここにあるのは、自己同一性を求めるあまり自分だけの趣味嗜好に走り、小さな世界で満足するというのではなく、あくまでこの現実において力を得て自他ともに認める形での自己実現を図ろうとするブルトンの欲望の発揮であり使命でもあるのだ。

注

1）引用文の後に示されている略記号は以下の文献を表わしている。イタリック体は下線で表記した。尚、引用文は全て筆者の訳による。

（PI）André BRETON, *Œuvres complètes I*, Pléiade, Gallimard, 1988

（PII）André BRETON, *Œuvres complètes II*, Pléiade, Gallimard, 1992

（PIII）André BRETON, *Œuvres complètes III*, Pléiade, Gallimard, 1999

（PIV）André BRETON, *Œuvres complètes IV*, Pléiade, Gallimard, 2008

（EII）Jacques LACAN, *Éctits II*, points, Seuil, 1971

（MP）Gilles DELEUZE et Félix GUATTARI, *Mille Plateaux*, Minuit, 1980

2）ブルトンの『地の光』の中に「謎学」と記された書物が出てくる。

3）Nicolas MALEBRANSCHE, *Traité de morale*, Garnier-Flammarion, 1995, p.41

4）François TRUFFAUT, *Le cinéma selon HITCHCOCK*, Robert Laffort, 1966, p.155
5）Gilles DELEUZE, *Le cinéma I, l'image–mouvement*. Minuit, 1983, p.274
6）Nicolas MALEBRANSCHE, *Entretiens sur la métaphisique*, Vrin, 1984, p.117
Nicolas MALEBRANSCHE, *Recherche de la vérité*, Galerie de la Sorbonne, 1991, p.428